ミュンヘンの文学散歩（2）

佐　野　晴　夫

6．カルル広場（シュタッフス）からゼントリンガー門へ

すでに見たカルル門より各方面へ分岐して走る市電の停留所や緑地帯を右手に眺めながら、ゾンネン街の大通りを南下してみよう。おしゃれであか抜けた商品を展示する専門店や事務所が軒をつらねている。歩道左側を進んで行くと、外国人に実用ドイツ語を教授することで著名なゲーテ学院（インスティトゥート）（Sonnenstr.25）がある。この学院の案内が大通りに表示されていないために、気付かず通りすぎる人が多い。家具店手前の通路を数メートル奥へ入った所に、学院の入口がある。そして、その前には、かって、パソコンと言う通称がうまれる以前に、早くも、ドイツへ市場開拓と調査のために、2人の日本人青年が東京秋葉原に本社をもつ会社より派遣され、若いドイツ女性の秘書とともに、パーソナル・コンピューターやそのソフトを販売する「ロジテック」があった。

かつてナチス・ドイツより迫害をうけたゲーテ学院は、ドイツ国内はもとより、日本をはじめとして諸外国へも進出しているが、その本部は、ミュンヘン大学近くのカウルバッハ街にある。もしドイツ語会話の習得のみが目的ならば、ベルリッツ会話学校がある。また個人家庭に滞在して、数週間、語学力を涵養したければ、大学うらのアマーリェン街に、スイス人の経営するホームステイ・イン・ミュンヘンがある。そしてその附近には、大学付属のガイド学校や通訳養成学校もある。また知られているようで盲点となっているのが、ドイツの誇る成人学校（フォルクスホッホシューレ）の外国人のためのドイツ語コースである。初級から上級まで、ホテルに罐詰になる短期集中講習から夜間または昼間の都合の良い曜日と時間で数カ月間かけて習熟を計かるクラスまで、選択できる。受講料は比較的廉価であるけれども、受講開始の時期に問題があるので、受講登録事務所（アインシュライブシュテレン）（Landwehrstr.3/IV）に問い合わせる必要がある。また大学入学を目指す場合には、ミュンヘン大学付設の「外国人のためのドイツ語コース」（Adelheidstr.13）に参加することを勧めたい。

ふたたび、話をゾンネン街へ戻して、左へ湾曲する大通りを進んで行くと、や

がてゼントリンガー門広場に達する。1318年に建造された城門の面影をのこす記念物である。かって城砦の端に位置する2本の6角形の塔は、中央の塔で連らなっていた。だが、この中央の塔は1808年に撤去され、残りの部分は1860年に改修されたうえ、1906年には3つの門が1つの大きなアーチへかえられてしまい、それどころか、第2次世界大戦で戦災にあった個所は、すっかり取り除かれてしまった。

7．セントリンガー門附近

昔、城砦を囲繞していた堀が、近代になって埋め立てられ、それが環状道路として役立っているのであるが、ゾンネン街はゼントリンガー広場から先きは、ブルーメン街・フラウエン街等の名称へかわって行く。広場に立って、今まで来たゾンネン街から西へ視線を転ずるとき、森鷗外や斎藤茂吉に関連して述べたペッテンコッフェル街、ヌスバウム街、リントヴルム街が見える。さらにブルーメン街を眺めるならば、すぐ左へ折れるけれども、直進するとミュラー街へ入る。この街18番（Müllerstr.18）の建物に、アウグスト・グラーフ・フォン・プラーテン（1796-1835、生誕地バイエルン州アンスバッハ市プラーテン街17、墓地イタリア国シラクサ市ランドリーナ別荘庭園内）が住んでいた。

プラーテンは、リューゲンの旧家ではあるが、貧乏な貴族の一枝につらなり、営林局長の息子としてうまれた。1806年にミュンヘン市のバイエルン幼年学校へ入った。1810年に王宮の小姓となり、1814年には陸軍少尉に任官して、仏蘭西軍と戦った。1816年にスイス旅行へ出かけているが、この時期、自らの同性愛的傾向を抑えがたく、激しく苦悩した。1818年に無期限の休暇をもらい、1819年にヴュルツブルク大学で法律・言語・哲学・自然科学を学び、1819年から7年間、エルランゲン大学で、とくにシェリングとシューベルトのもとで研究し、またリービッヒと交際した。この間、ジャン・パウル、ヤーコップ・グリム、ゲーテ、リュッケルトを訪問している。1824年に伊太利旅行を企て、そのため、賜暇違反のかどで禁固刑をうけた。1826年までエルランゲン大学図書館で司書をつとめ、そして自発意志で伊太利へ亡命し、ナポリやローマなどですごした。幸い、1828年以降、バイエルン国王ルートヴィッヒ1世から僅かながらも年金をもらうようになったため、1832年より、毎年、短期間ながら、ミュンヘンへ戻るようになった。1835年にフローレンツでコレラが発生し、これを恐れて、彼は逃避したけれども、シシリー島で発病し、死亡した。

日本でも、プラーテンの抒情詩を愛好するものが多数おり、「世界名詩大成」6

（昭和36、平凡社）収録の川村二郎訳「詩集」（抄）以前にも、森鷗外訳「人生」、上田敏訳「伊太利」「レオナルド・ダ・キンチ」や生田春月訳「トリスタン」「ねがひ」「アルプスの雪輝く庖」が見出せる。ここでは、大正期から昭和期初めに活躍した詩人生田春月の訳詩を見てみよう。名詩名訳のひとつに数えてよい絶品である。

トリスタン

美はしきもの見し人は
世のいそしみにかなはねば。
美はしきもの見し人は。

愛の痛みは果てもなし
望むはひとり痴者ぞかし、
愛の痛みは果てもなし。

げに泉のごとも涸れはてん、
ひと花ごとに死を嗅がむ、
げに泉のごとも涸れはてん。(23)

はや死の手にぞわたらされつ、
されど死を見てふるふべし

この世におもひをかなへんと
美の矢にあたりしその人に

ひと息ごとに毒を吸ひ
美はしきもの見し人は

8．ゼントリンガー門から聖母（マリア）広場へ

ゼントリンガー門をくぐって、右のオーベルアンガー大通りを進むと、リンダー市場の手前にミュンヘン市立博物館（St.-Jakobs-Pl.）がある。この建物内は、ドイツ醸造博物館、人形劇博物館、写真博物館、映画博物館、楽器博物館から成っている。またこの南側にイグナツ・ギュンター・スタディオ展示場（St.-Jakobs-Pl.）がある。

オーベルアンガー街と平行する左のゼントリンガー街を北上すると、左側の家並の中にアザム家と聖ヨーハン・ネポーク教会（アザム教会）の建物（Sendlinger Str.61,62）が隣接して眼に入る。

アザム兄弟によって1746年に建てられた建物は、バイエルン風の後期バロック様式から成っている。建物正面には多彩な彫刻が施されており、その左の下部が感覚世界を表わし、中央の上部は古典古代の天国を、その下部は人間の現世芸術を表わしている。家の入口上部の右には、キリスト教の天国を描いたものである。

アザム兄弟は、教会内で上方より、僅かな光線しか取り入れなかったため、かえって大理石や壁のフレスコ画への印象を効果的にしている。

この街路をさらに歩むとき、「南独新聞(ズートドイチェ・ツアイトング)」(Sendlinger Str.)の本社が見える。長期間、ミュンヘンに滞在する者は、この新聞の住宅広告で下宿さがしするのも一方法である。この新聞社社屋の手前に左折する道がある。この道が、さらに少しばかり左へ曲がってブルン街と町名を変える前のハッケン街7番(Hackenstr.7)に、ハインリッヒ・ハイネの旧居がある。家屋はラートシュピーラー屋敷と呼ばれており、記念額が2階の壁面にはめ込んである。

ハインリッヒ・ハイネ(1797-1856)は、ミュンヘン大学のドイツ文学教授になる目的で1827年にやって来たのである。30歳のハイネは、到着後、早速、街中を歩いて、その印象を「静かな部屋」で書きつづった。「私達は気が重い。けれども蛮風な聖堂を見て、憤慨しなかった。聖堂は、あいも変わらず、脱靴器状の姿で全市を見下すようにそそり立ち、中世の陰影と亡霊とをひざ元にかくしている。」就職を願って、彼は自説を強烈に主張するのを控えていたので、彼の発行する「新一般政治年鑑」を読んで注目していたバイエルン国王のルートヴィッヒ一世は、彼の希望を叶えようと考えた。けれども、宮廷の長老や教会の幹部は彼の信条に深く疑念を懐き、彼が反教会的な立場を取っていると、国王を諫めた。ハイネにとって、初め、ルートヴィッヒ王は素敵な国王に映ったけれども、のちに失望して、「時事詩集」(1844)の中で皮肉をこめた有名な詩句で嘲笑した。ふたたび、ここで、ハイネの全抒情詩を本邦で初めて完訳した生田春月の訳稿で見てみよう。

ルウドヰッヒ王の讃歌(第2節・第6節・第9節)

生田春月訳

芸術がお好き、きれいな婦人がお好きで　　その肖像をお画かせになり
この画像の妾房(セラール)のなかを　　この芸術の去勢官はお歩きになる

☆

ルウドヰッヒさんは大詩人で　　歌をお歌ひになるとアポロンは吃驚して
その前に跪いて嘆願する。「おやめ下さい！でないと狂気(きちがひ)になります、おお！」

☆

お猿だって、またカンガルウだって　　基督教信者に改宗するや否や
きっと聖ルウドヰッヒさまを　　その保護神に祭るにちがひない(24)

ハイネがミュンヘンにやって来た頃、気候が厳しく、創作の仕事にも支障を来した。数日間、病床につき、漸次、その気候にも慣れた。そこで辻馬車に乗り、寓居から河向こうのボーゲンハウゼン地区にあるモントグラス庭園へ出かけ、ビールを飲んだ。ここで飲むビールは、すこぶる美味で、からだの血が薄くなってしまうのではないかと思える程だった。希求した教授職が絶望となった1828年7月7日に、彼はイタリアへと旅立った。

ハッケン街の北に位置する街（Altheimer Eck）にクレーメンス・ブレンターノ（1778-1842）の仮寓があった。コブレンツにうまれたブレンターノは、どこにも安住の地を持ちえず、1833年、ミュンヘンにたどり着いた。この都市で後期ロマン派の詩人と交際したばかりでなく、女流画家エミーリエ・リンダーへ、彼は愛を捧げた。1842年に、死病に犯された身でミュンヘンを去り、アシャフェンブルクで生涯を終えた。なお、彼は宮廷庭園や英国庭園にも近い環状道路のフォン・デア・タン街（Von-der-Tann 11）にも住んだことがある。そして、ミュンヘン滞在中に「雛鶏」「雄鶏」といった詩篇を創ったが、「1834年7月14日」という詩篇の拙訳を試みてみよう。

1834年７月14日（第２節）

よく知っているんだ、私の心中で君が愛しているものを—
それは私の胸中に燃える白熱だ—
それは魅惑的な誇りだ。
私の心から射し染める深く秘めた
ひそかな悦びと化して君へ呼びかける。
私を石へ封じ込めてくれ、と。
そこで、けど、私は心底より呼ぶんだ！
私のそばに来て、生き、愛し、死んでくれ。
君、ぜひ、君、是が非でも。(25)

9．聖母（マリア）広場からイーザル門へ

聖母（マリア）広場を東進する大通りはタールと呼ばれイーザル門まで続く。聖母（マリア）広場から右手の、すでに11世紀にテーゲルン湖に居住していた僧侶たちによって建立された聖ペテロ寺院と13世紀に建造された聖霊教会との間をぬけると、ここはヴィクチュアリエン広場である。遠い日本からやって来た旅行客にも、親しみの持て

る庶民的な雰囲気の市場である。皮をはぎ、首だけ切除した豚をぶら下げた肉屋・東西各地の多種のワインを陳列する酒屋・異邦人の眼には珍しい薬草店・独特の香気を放つ漬物店・季節ごとの果実を商う店・白菜や大根、かぶや午蒡、胡瓜や葱までも並べる八百屋・鰻や鯖の燻製とともに、仏蘭西より輸送されて来た生の鱈、鰯、ヴィーナス貝、ミース貝、時には鮪のとろまで売る魚店等が並んでいる。鮮魚がほしいとき、「北海屋(ノルトゼー)」でもよいけれど、市場の東端に面した「白鯨屋(モービーディック)」が最もいきが良い。ここでは茹でたばかりの海老や蟹を肴に仏蘭西産ワインを飲むことが出来る。

この市場では、店舗の場所が親子でうけ継がれ、とりわけ、市場の生え抜きの女性はバイエルン人気質丸出しで、気っぷがよく、ユーモアに富み、商売熱心である。ヴィクテュアリエン市場の年間最大のハイライトは、謝肉祭期間の火曜日に開かれる催し物である。市場のおかみさん達は、ブラスバンドの音楽に合わせて、コミックなダンスに興じる。また市場内には当地の人気民謡歌手カルル・ファレンティン、ヴァイス・フェルドル、リースル・カルルシュタットを記念する3基の噴泉が設けられている。

ふたたび、タール大通りに戻ると、ノイハウザー街やカウフィンガー街の延長道路でありながら、楽器を演奏したり、チョークで絵をかいたりする大道芸人が少ないことに気づく。

やがてたどり着くイーザル門(トア) (Tal 43) は、バイエルンのルートヴィヒ皇帝のもとで、1294年から1347年にかけて造営された城砦の一部である。1833年に建築家フリードリッヒ・フォン・ゲルトナーがこの城門を改築し、その際、画家ベルンハルト・ネーエルが中央の塔の外壁にフレスコ画を描いた。その画材は、ルートヴィヒ皇帝がアンプフィング近郊の会戦 (1322年) で戦勝し、ミュンヘンに凱旋して来た情景であった。戦災に遭遇した門も、ポーランドの専門家たちによって見事に修復された。

この城門の塔内には、ファレンティン博物館がおかれ、民謡歌手で作家だったカルル・ファレンティン(本名ファレンティン・ルートヴィヒ・ファイ、1882-1948)の収集品や骨董品が展示されている。最上階には民謡歌手の居酒屋があり、店内をユーゲント様式で特有な雰囲気を醸し出している。ファレンティンは、ヴィクチュアリエン広場で同じく噴泉の名称を捧げられたリースル・カルルシュタットとともにグロテスクな劇場面を案出し、ミュンヘン児から絶大な人気を博した地方作家であり、1961年には「全集」も刊行されている。彼の生家は、イーザル河右岸に面したツェペリン街41番にある。

地方作家と言えば、ローレンツ・フォン・ヴェステンリーダー（1748-1829）に言及しないわけにはいかない。タールと環状道路フラウェン街に狭まれたヴェステンリーダー街こそ、著書「善良なエンゲルホーフ青年の生涯」でもって、バイエルンで最初の良書と絶賛された作家に因んで名付けられたもので、この景観に富む街の16番に、旧居の記念額が掲げられている。なお、このミュンヘンにおける啓蒙主義の文学運動の代表者は、南墓地に埋葬されている。

10. カルル門（シュタッフス）からレンバッハ広場（プラッツ）へ

起点のカルル門に立ち帰って、今回は、環状道路を左廻りに漫歩を試みてみよう。まず出発点のカルル広場25番(Karlspl.25)に、かってレストラン「リントナー」があった。1854年以降ミュンヘン大学の教授となり、1885年以降は王立・国立博物館館長を務めたウィルヘルム・ハインリッヒ・リール（1823-1897）は、著書「文化史上の英才たち」(1891)の中で、このレストランにたむろしたロマン派の芸術家の群像を描写している。彼はヘッセン州のライン河畔ビープリッヒにうまれ、ミュンヘン市シュワービング地区の旧北墓地に永眠している。

カルル広場から黒ずんだ宮殿風の裁判所に見とれながら、環状道路の左側(西)の歩道を5分北上すると、レンバッハ広場にぶつかる。ドイツ銀行(Lenbach-pl.2, A.シュミット設計、1888-1890施工）ベルンハイマー・ビル（同広場3番、ティルシュおよびデュルファー共同設計、1888-1890施工)バイエルン公務員保険協会ビル（同広場4番、エマヌエル・フォン・ザイドル設計、1904-1905施工）等が林立している。道路の向い側(東)には「芸術の家」（同広場7番、G.v.ザイドル設計、1892-1900施工）や区裁判所の「マックス城」が見える。かって「ヴィルヘルム城」のあったこの場所に、17世紀後半、マキシミリアン・フィリップ大公の居城が建てられたことから、1944年に戦災にあったあと、1953年から2年かけて建築家パープストとグラースの設計で建造された近代的ビルも、マキシミリアンの愛称マックスをつけて呼ばれているのである。

さて、環状道路は、レンバッハ広場で二またに分離し、道路の正面に噴水のある公園が現われる。昼間に見る素晴しさばかりでになく、夜間の照明をあびた施設の景観は格別である。この梯形状の公園様式は、19世紀末の典型的なものである。特に、「ヴィッテルスバッハの噴泉」は、アドルフ・フォン・ヒルデブラント（1847-1921)が1893年から1895年にかけて製作したもので、ローマのバロック盛期の噴水にも劣らぬ見事な作品である。この噴泉は、ミュンヘンのヴィッテルスバッハ王家の水道事業に寄せた多大の尽力に感謝して造られたものである。馬上

の男性が石を投じようとし、他方、女性が水がめをさし出す形姿は、水の力とその恵みを象徴する。1944年に、左側の像の一部が戦災でこわれたが、1951年から翌年にかけての修理で、復元された。

またこの公園のオットー街へ向った所にゲーテ記念碑(1962年、ディーツ製作)が設置されているけれども、これに気付くことなく通りすぎる市民も多い。

11. マキシミリアン広場からナチス犠牲者広場へ

「ヴィッテルスバッハの噴泉」の背後にも、緑地帯が続き、マキシミリアン広場と町名をかえる。この公園地帯を東北へ歩いて行くと、マックス・フォン・ペッテンコッフェル記念碑（1909年、リューマン製作）ユストゥス・フォン・リービッヒ記念碑（1863年、ヴァークミュラー製作）シラー記念碑（1863年、ヴィトマン製作）がある。またこの公園広場5番（Maximilianplatz 5）には、既出のフランツ・グラーフ・フォン・ポッツィの旧宅があつた。そしてレンバッハ広場で分岐した道が、ふたたび合体する場所がナチス犠牲者広場である。この広場の北東部に、1923年11月9日、ヒットラーがひきおこした暴動と将軍廟への行進のため、それを阻止しようとして倒れた多数の死者を慰める記念碑が、さりげなく建っている。この事件については、のちほどオデオン広場で触れてみたい。

12. レンバッハ広場から王宮まで

ビジネス街であるレンバッハ広場から右折して、ノイハウザー街と平行するパツェリィ街に入ると、右側に日本航空ミュンヘン営業所（Pacellistr.2, Tel〔089〕223881）がある。ミュンヘン観光その他について、日本語で情報のほしい者は、気軽に立ち寄るとよい。親切に対応してくれる筈である。

やがて道路も市電の軌道も、次の緑地公園を間に狭んで2つに分かれ、200m余り先きで、再び合体するプロメナーデン広場にさしかかる。この広場4番（Promenade-Platz4）がフランツ・グラーフ・フォン・ポッツィ（1807-1876）の生家である。

ポッツィは陸軍中将や宮内省調度局長等を歴任した父親と女流画家だった母親との間にうまれた。1825年から28年にかけてランツフート大学およびミュンヘン大学で法律を学び、その後、司法官試補となった。1830年にバイエルン国王ルートヴィヒ1世の2等式部官となり、国王やマキシミリアン皇太子の随員として数回伊太利へ旅をした。1863年に式部長、1864年に侍従長となった。素描家や音楽家として著名であったばかりでなく、多才な詩人として、「童話」(1839)「学生歌今昔」(1845)「新人形道化芝居」(1855)「〈戯曲〉代父トート」(1855) 等の諸作

品を遺している。彼の遺品はバイエルン州立図書館(Bayerische Staatsbibliothek München) が保管している。

この長方形の細長い広場は、かって塩市場の倉庫跡である。最初の岩塩貯蔵庫は15世紀初頭に建てられ、18世紀頃からは貴族や富豪の館が建ち並び、その一部は、今なお昔日の面影を残している。1780年には、行進の行われる広場として菩提樹が植えられ、凡そ1810年頃から、「散策広場(プロメナーデ・プラッツ)」と呼称されるようになった。そしてこの緑地の中に4個の記念があり、クリストフ・ヴィリィバルト・グルック (1848年、ブルグガー製作) 音楽家オルランド・ディ・ラッソ (1849年、ヴィトンマン製作) とともに既述の作家ロレンツ・フォン・ヴェステンリーダー (1861年、ヴィトンマン製作)、マックス・エマヌエル (1861年、ブルクガー製作) が顕彰されている。

さて、王宮へ急ごう。プロメナーデ広場から、マファイ街、そして電車軌道に従って左折し、再びすぐ右折してペルーザ街に入ると、すでに宮殿の一部が視野に入り、やがてマックス・ヨーゼフ広場に到着する。ここが、かってヴィッテルスバッハ家の王朝が栄えた王宮である。

ミュンヘン中央駅から王宮へ行く最も便利な交通手段は、駅前北で路線番号19の市電に乗り、マキシミリアン街で下車すると良い。地下鉄 (U-Bahn) ならば、オデオンス広場(プラッツ)で、また高速電車 (S-Bahn) ならば、マリア広場でおり、5分余り歩いた場所にある。

13. 新王宮前から旧王宮へ

王宮(レジデンツ)を訪ねる前に、旧宮殿(アルター・ホーフ)を訪問してみよう。マックス・ヨーゼフ広場の向いにある建物がミュンヘンの中央郵便局(ハウプトポスト)(Residenzstr.2)であり、かってのフォン・テーリング=イエッテンバッハ伯爵の華やかな館であった。ヨーハン・バプティストとイグナーツ・アントン・グレーツライナーの兄弟が1747年から54年にかけて建築したものである。そして、さらに、1834年から38年にかけて、レオ・フォン・クレンツェが中央郵便局へ改造した。

隣接の建物は中央造幣局(ハウプトミュンツェアムト) (Hofgraben 4) である。この建造物は、アルブレヒト5世大公が1563年から67年にかけて厩および美術品陳列室として宮廷建築師ヴィルヘルム・エックルに命じて建てた。造幣局として使用されるにあたり、フリードリッヒ・ゲルトナーの父親アンドレーアル・ゲルトナーによって、建物に擬古典的なファサードがつけられた。また縦35m、横12mの中庭は、3層からなるアーケードで取り囲まれて、華麗である。この中庭の様式は、ドイツ・ルネッサンス

の歴史の中で重要な地位を占めている。

いま、中央郵便局と中央造幣局との間にある「宮殿の御堀」を意味するホーフグラーベンを進み、城門のアーチをくぐれば、もうここは旧宮殿である。ヴィッテルスバッハ王家の居城は、ハインリッヒ獅子王にまで遡ることができ、彼の政庁のあった場所に建造された。外敵ばかりではなく、峰起した市民たちからも、安全を計るために、当時の城郭の東北の一角に居住区域を設けた。城は、1255年頃、ルートヴィッヒ謹厳大公のもとに築かれ、1328年から47年にかけて、バイエルン国王でもあったルートヴィヒ皇帝の居城となり、あわせてドイツで最初の皇帝の政庁所在地ともなった。しかし、1380年以降、宮殿は別の場所に移った。つまり、現在の王宮の西北部にかってあった新城塞へとって代わられた。従って、旧宮殿は、1466年以後、ジィギスムント大公やクリストフ大公の屋敷となった。さらに16世紀には行政庁舎となり、19世紀には部分的に破壊されてしまった。1816年にバイエルン王国の会計局が入居し、今では州の財政局へ名称を変えている。第2次世界大戦中、甚大な被害をうけたけれども、復興事業(1968年)によって、昔日の面影を取り戻した。

そしてアーチ門をふたたびくぐるとブルク街である。城塞(ブルク)という名称が付いていることからも分かるごとく、かって最古の都市城壁が東北に延びていた道である。当時、イーザル河の支流を利用して内堀とした名残りを、軽い斜面の跡で確認できる。ブルク街5番の建物は、かって市の事務局があったが、1552年に改築されたけれども、ミュンヘンで後期ゴシック様式で完全に保存されている唯一の建築物である。「ヴァインシュタードル」と呼ばれているこの建物内に、趣味の良いブドウ酒を飲ますレストランがある。隣家には———建て直されていることは言うまでもないが———ヴォルフガング・アマデウス・モーツアルトがしばらく滞在し、ここでオペラ「イドメデオ」を作曲した。そしてその作品は、1781年に、ミュンヘンで初演されている。

またブルク街11番は、南独ロココ様式の天才的建築家で、しかもミュンヘンの宮廷芸術を世界のトップ・レヴェルへ高めた大フランソア・ドゥ・クーヴィエ(1695-1768)の終焉の地である。この宮殿建築家の業績として、王宮のクーヴィエ劇場、世界で最も美しいロココという評価の富貴の部屋、宮廷庭園の間、緑の画廊、そしてプランナー街のプライジング館(パレ)、ニンフェンブルク庭園のホルシュタイン、アマーリエン城、さらにテアティナー教会の中央のファサードを数え上げることが出来る。

次のブルク街12番は、バイエルン王国法律制定の大立者ヴィグレウス・フォン・

クライトマイル男爵（1705-1790）がくらし、臨終を迎えた家である。

ブルク街を通りぬけると、左に旧市役所の所在するタール大通りに出る。高速電車で聖母広場から旧宮殿へ行く者は、今来た道を逆に歩けば良い。ついでに、旧宮殿のすぐ近くにあるビア・ホール「ホーフブロイ」へ別の道を辿って行ってみよう。

14. 聖母広場から「ホーフ・ブロイ」へ

聖母広場よりタールを経て、今度は、旧市役所脇のシュパルカッセン街を選び、レーデラー街へ右折してみよう。レーデラー街3番の「ツェルヴィルクゲヴェルベ（皮なめし地下室）」と呼ばれる建物に注目しよう。当初は、ヴィッテルスバッハ家の鷹小屋があつたにすぎないが、1264年にルートヴィヒ謹厳大公のもとで建物がつくられ、15世紀末まではさほどの改造もされなかった。そして旧宮殿に大公所属の新しい醸造所が建てられるまでは、ビール製造所となっていた。だが、凡そ1590年から1733年までは市民個人の所有する動物解体の処理場となっていた。今日でも、鹿や鴨のようなけものや野鳥の精肉が入手できる場所である。ここは、ミュンヘンでも中世の面影を残す数少ない世俗的な印象を与える建物で、部屋には、美しい十文字の交差するアーチ装飾をもっている。間もなく、オルランド街へ左折すると、プラッツルに面したホーフブロイの建物が視野に入る。

その名を世界に知られている、ミュンヘンの象徴「ホーフブロイ」（Plazl 9）の起源は、1589年まで遡る。ヴィルヘルム5世が、宮廷付属醸造所として創設した。1592年に、旧宮殿の浴場跡に建てられた建物（1591年に建造され、1831年に撤去された）で、ビール生産が始められた。初めは、褐色の大麥ビールのみであった。小麥を原料にした白色ビールが醸造されるようになったのは、1602年以後のことである。1613年以来、アルコール度の高いボック・ビールとともにアインベック・ビールがとって代った。1644年に、選帝候付属白色ビール醸造所が、既出のツェルヴィルクゲベルベから、現在の場所へ移されたとき、褐色ビールも製造された。1890年に、ビール工場がインネレ・ヴィーナー街へ移されてからは、プラツルの建物では、公立のビア・ホールが開店されることになった。また1896年には、リットマンとマクソンの手によって、古い建物が改造された。地階のホールでは、毎日、朝から深夜まで、にぎやかなブラスバンドの音楽の中で、ビール愛飲家たちが、心弾ませている。建物の上階にも広い広間があり、全席を合わせて、5千人収容できる。この建物は歴史の証人であり、その3階広間で、1920年2月24日に、25カ条からなるナチ党の綱領が採択されたと言う。

ホーフブロイハウスの向い側に「プラツル劇場」(Münzstr. 8-9)がある。夜8時から開演しており、バイエルン地方の方言による芝居や民謡でたっぷり楽しませてくれる。プラツル広場を北進すると、コースト門と呼ばれる一角に出る。その先きが、美しいマキシミリアン街である。

すぐ近くの「ヘンメーター・ハウス」と呼ばれる建物(Maximilianstr. 32)では、現在、写真屋・眼鏡屋・古董屋が入居しているが、ここに1885年から1891年まで、ノールウェイ最大の戯曲作家ハインリッヒ・イプセン(1828-1906)が滞在したことがある。このノールウェイ人にとって、ミュンヘンは、ローマと並んで住むうえで自由かつ快適であり、美しい第2の故郷のように感じた。彼は明るく、天井の高い、上品な部屋の中で、「海から来た女」(1888)「ヘッダ・ガブラー」(1890)を執筆した。

イプセンは、マキシミリアン街の住民になり切って、殆んど毎日午後2時15分に住居を出ると、銀髪のぼさぼさ髪にシルクハットをかぶり、いつも黒服で、片手をうしろへ回し、もう片方の手に傘をステッキ代わりに使って、優雅な足どりで喫茶店「マキシミリアン」へ行った。そこで新聞や雑誌を読み、英気を養った。書斎に戻ると、彼は働き蜂のように勤勉であり、社交界には殆んど姿を現わさなかった。しかし、彼が愛したのはイーザル河畔の都市ばかりではない。2人の女性が北欧詩人を魅了した。ひとりはウィーンにうまれた18歳のエミーリエ・バールダッハであり、詩人は「私のお姫さま」と呼んだ。もうひとりは24歳の女流画家ヘレーネ・ラフであり、彼は「可愛い子ちゃん」と呼んだが、彼の「最後の恋人」となった。

さらに、次に、マキシミリアン街25番の「小劇場(カシマーシュピーレ)」(正式には「ミュンヘン劇場付設小劇場」)で、クライストの「ハイルブロンのケートヘン」や、ビュヒナーの「ダントンの死」、ゲーテの「タウリス島のイフィゲーニエ」やストリンドベリーの「令嬢ジュリー」といった演劇を新しい解釈と奇抜な演出法のもとで、観てくるのも悪くない。ベルト・ブレヒト(1898-1956)は、この小劇場で、とは言え、アウグステン街時代の1922年に「夜中の太鼓」を、翌年には「やぶ」を初演している。ここにある建物は1900年から翌年にかけて建築され、1926年には小劇場はアウグステン街からこちらへ移って来、数回にわたり改造されて、今や、ドイツで有数のユーゲント様式を備えた劇場として注目されている。ブレヒトは、ここでF. ヴェデキント、O. M. グラフ、K. ヴァレンティノやL. フォイヒトヴァンガーと出会った。とくに、ミュンヘンに生まれたリオン・フォイヒトヴァンガー(1884-1958)は、小説家・戯曲家・劇評家として活躍したばかりでなく、文芸協

会「ポイボス」の主宰者や雑誌「シュピーゲル」(1908) の創刊者として忘却するわけにはいかない人物である。この多才な詩人が少年期をすごした聖アンナ広場2番には記念額が掲げられている。また1921年から23年にかけてのミュンヘンの雰囲気を映している長篇小説「成功」(1930) では、ルートヴィッヒ・トーマスが「マタイ博士」、ブレヒトが「カスパァル・ベックル」、ヴァレンティンが喜劇俳優「ヒールル」の匿名で登場する。

マキシミリアン街をこれから先へ進むのは、後回しにして、1858年に完成したホテル「四季」の風格のあるたたずまいなどを愛でながら、王宮前に戻ることにしよう。

〈未完〉

1991.4.10

註

(23) 佐藤義亮編「世界文学全集 (37)　近代詩人集」(昭5.5、新潮社)　P.273-274.

(24) 生田春月訳「ハイネ全集 (2)　新詩集・ロマツェロ」(大9.12、越山堂)　P.335-337.

(25) 参照　(Hrsg.)　Hans Wagener : Deutsche Liebeslyrik.1982, Philipp Reclam jun. Stuttgart. P.162.